イギリスにおける功利主義思想の形成
――経済社会における一般幸福の意義を通じて――

中　井　大　介

概　　要

功利主義思想は，18 世紀後半にイギリスの思想家ベンサムの手によって本格的に誕生し，J.S. ミルによる修正を経て，19 世紀後半にヘンリー・シジウィックによって古典的功利主義として完成されるにいたった．本稿では，主として J.S. ミルとシジウィックという二人の古典的功利主義者を対象としながら，19 世紀のイギリスを舞台とした功利主義の形成過程と経済社会における規範として「最大多数の最大幸福」ないしは「一般幸福」を掲げることの意義とを検討する．ベンサム，J.S. ミル，シジウィックは，一括りに古典的功利主義と見なされる場合もあるが，彼らの思想は極めて重要な点で異なっている．とくに J.S. ミルとシジウィックを対比させることで，功利主義の多面性やその特徴が浮かび上がってくるのである．

キーワード
ベンサム，ミル，シジウィック，功利主義，経済と倫理

Ⅰ．はじめに

功利主義（utilitarianism）は，ある意味長い歴史を持つ概念であり，その起源はアリストテレスにまで遡るともいわれる．しかし，功利主義が本格的に定式化され，広く認識されるようになったのは，近代イギリスの法学者・思想家として名高い，ジェレミー・ベンサム（Jeremy Bentham: 1748-1832 年）以降である，というのが通説である．

ベンサムが「最大多数の最大幸福」（the greatest happiness of the greatest numbers）というフレーズを明示的に用いたことによって，功利主義という概念は広く知れわたることになった[1]．その特徴をシンプルに表現すれば，より多くの人がより多くの幸福を得られることを望ましいとする，規範的主張ないし価値観である．たとえばベンサムは，「効用原

理（功利性の原理）」(the principle of utility）について，次のように説明している．

> 効用原理とは，その利害が問題となる人々の幸福を増加させる見込みがあるか，もしくは減少させる見込みがあるかどうかに基づき，[…] すべての行為を是認ないし否認する原理である．すなわち，私の言うすべての行為には，私的な諸個人のすべての行為だけでなく，政府のすべての政策もが含まれる．（Bentham 1789 [1996], pp. 11-12）

最も広い意味での功利主義とは，諸個人の幸福をすべて足し合わせた「一般幸福」(the general happiness）の最大化を究極目的に位置づけながら，個人にとっての望ましい生き方や政府の果たすべき役割について論じる，一連の思想と言えよう．

ここで注目されるのは，ベンサム自身が明言しているように，功利主義とはその対象として，個人の行為だけでなく政府の政策をも含めた包括的概念として定義されている点である．現代においても，倫理学や哲学だけでなく，経済学，政治学，社会学といった多岐にわたる学問領域において，功利主義という名称がしばしば登場しているのである．

とはいえ総じていえば，功利主義にたいする評判は芳しくなく，むしろ批判の標的としてしばしば引っ張り出されているのが現状である．たとえば，功利主義は単なる刹那的な快楽至上主義に過ぎず，快楽よりも望ましい崇高な美徳や価値観が存在するという事実を蔑にしてしまっている．あるいは，「一般幸福」という全体のパイの拡大を至上目的とするがゆえに，過度の効率性追及へと陥ってしまったり，少数派の幸福の犠牲を正当化してしまったりする．こういった批判は，ある意味ベンサムの時代から続く，功利主義に対する伝統的反応とさえいえる．近年では，倫理学や哲学などの分野において，「行為功利主義」(act-utilitarianism）と「規則功利主義」(rule-utilitarianism）を区別し，より厳密な形式で功利主義の性質を精査し，特に後者の有効性を打ち出そうとする展開も存在する[2)]．あるいは，人間性の発展や人格の完成なども，幸福や快楽を構成する重要な要素として位置づけ，「理想的功利主義」(ideal utilitarianism）という観点から功利主義を前向きに見直そうとする傾向も存在する[3)]．しかしながら，上述のような功利主義に対する批判や反発は，

1）ただし，ベンサムが「最大多数の最大幸福」というフレーズを用いた最初の人物ではない．ベンサム自身認めているように，ジョセフ・プリーストリー（1733-1804 年）の著作において，このフレーズはすでに使用されていた．また周知のように，功利主義思想の形成にとっては，ベンサムと並んでディヴィッド・ヒューム（1711-1776 年）の存在も重要である．

2）行為功利主義と規則功利主義について扱った簡明な邦語文献として，加藤（1997）がある．あるいは児玉（2010）では，倫理学の分野における功利主義の歴史的展開や直観主義との関係が明快に論じられている．

3）理想的功利主義について，あるいは 19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけての自由主義・理想主義の立場からの功利主義への反応などについては，Weinstein（2007）を参照．

いまなお根強く存在するのも事実である．

本稿の背景にある大きなテーマは，経済学や政治学といった社会科学の文脈において，功利主義がいかなる意義を有するのかを検討することである．社会全体にとっての究極目的として「一般幸福」を据えることには，どのようなメリットが存在するのだろうか．

以下では，18 世紀後半以降ベンサムによって打ち出された功利主義が，19 世紀半ばに J.S. ミルの手を通じてその内在的な問題点があぶりだされ，最終的に 19 世紀後半にシジウィックの手によって古典的功利主義として完成されるに至った足跡をたどることにしたい．ベンサム，ミル，シジウィックは，一括りに古典的功利主義者と呼ばれる場合がある．しかし，彼らの経済思想――あるいはその背後にある倫理思想――は，極めて重要な点においてその性質を異にしているのである．古典的功利主義の形成とその変遷に着目することで，経済思想としての功利主義の特徴を浮かび上がらせることにしたい．最後に第 4 節では，以上のように形成された功利主義にたいする反応やその後の受容過程について，ムーアやケインズに照準をあわせながら，若干の検討を与えたい．ムーアやケインズはケンブリッジにおけるシジウィックの後輩にあたり，シジウィックの功利主義をいかにして継承していくのか――あるいは敢えて継承すべきでないのか――が，彼らの課題の 1 つであったとも考えられるからである．

本稿では，主として経済学という社会科学の領域において，功利主義という概念がどのような意義を有するのかについて検討したい．しかし，ベンサム，ミル，シジウィックにおいて，経済や政治の問題は，倫理や哲学と不可分の問題でもあった．すなわち古典的功利主義について検討する場合，私たちは倫理学，政治学，経済学の深い相互関係に直面するのである．あるいは，各自の思想形成や相互交流とも重ね合わせながら，功利主義の形成と受容をたどることにしたい．実際本稿で対象とする人物の間には，緊密な関係が存在している．J.S. ミルの父であるジェームズ・ミルは，ベンサムの弟子であった．シジウィックは，ベンサムとミルから大きな知的影響を受け，自らの抱えた倫理的・哲学的問題をミルに打ち明け，助言を求めたこともあった．あるいはシジウィックとムーアやケインズとの間には，「使徒の会」を通じた特別な絆が存在した．功利主義の形成と受容を理解する際に，こうした背後にある彼らの個人的経験や相互関係が 1 つの手がかりとなるのである．

Ⅱ．J.S. ミル――ベンサムの功利主義を乗り越えて――

J.S. ミル（John Stuart Mill: 1806-73 年）は，ある意味この世に生を受けたそのときから，

功利主義との深い繋がりをもっていた．哲学者・歴史家として，あるいは経済学者としても知られる彼の父，ジェームズ・ミル（James Mill: 1773-1836 年）は，ベンサムの直弟子であり，ベンサムの功利主義から深い感銘を受けた人物であった．この父ジェームズは子ミルにたいして，幼児期から徹底した英才教育を施したのであった．

父の強い期待にこたえるかたちで，早くからミルはさまざまな言語や学問分野に習熟し，「世界の改革者」（a reformer of the world）を目指す若き学徒として，順調に歩みだしつつあった．とりわけベンサムの著作が自らに与えた決定的影響について，晩年ミルは自伝のなかで次のように振り返っている．

> 1821 年の冬，はじめてベンサムを読んだそのときから，[…] 世界の改革者になるという，まさしく生涯の目的と呼ぶべきものを私は抱くようになった．私自身の幸福は，この目的と完全に同一視された．私の望んだ個人的な共感は，こうした計画に一緒になって取り組んでくれる人々からの共感であった．（Mill 1873, pp. 132-133）

若きミルは，ベンサムの功利主義思想に感化され，彼自身の幸福もこの理想の実現にあると考えたのであった．

しかし，その 5 年後の 1826 年の秋頃から，ミルは深刻な「精神の危機」へと陥ってしまう．当初ミルは，「神経の鈍麻した状態」にあった．そこで，これまで自身が懸命に取り組んできた「生涯の目的」が，今すべて実現されたとすれば，それは果たして自身にとって幸福といえるのかどうかを自問してみた．その結果，抗いがたい彼の自意識が導き出したこたえは，「No!」であった．この自らの内面から発せられた声を耳にしたことで，それまで彼の活動と信念とを支えてきたその基礎が崩れ去ってしまったのである[4)]．

「精神の危機」は，とりわけ 1826 年から 1827 年頃にかけて，ミルを深く苦しめることになる．そして，ここから徐々に立ち上がり，ミルが自らの思想を確立していくその過程において，さまざまな要因が彼に影響を与えていくことになる．たとえばそれは，次第に活発に議論されつつあった社会主義や共産主義であり，当時の風潮でもあったロマン主義であり，あるいはハリエット・テイラーとの実際のロマンスでもあった[5)]．そしてミルは，ベンサムの功利主義にたいして一定の疑念を抱くようになり，ここから乖離しながら「私

4）その原因には，過度の英才教育や厳格な父親へのコンプレックスがあったとも指摘されている．ミルの『自伝』を手掛かりとしながら，「精神の危機」を心理学的に考察した Levi（1945）では，子ミルにたいして冷淡で厳格であり，愛情や思いやりに欠いた「神」のごとく存在であった，父ジェームズの強い影響が指摘されている．

5）ミルのロマン主義的な傾向については，たとえば矢島（2006）に詳しい．またミルの生涯や人物像については，Bain（1882）や Capaldi（2003）などを参照．

の理論」を形成していくのである．

> 実際，幸福こそがあらゆる行動規則の試金石であり，そして人生の目的であるという信念が揺らぐことはなかった．しかし，こうした目的は，それを直接の目的としない場合に限って，むしろ達成されるのだと考えるようになった．自分自身の幸福ではなく，他の人びとの幸福であれ，人類の改良であれ，あるいは何らかの芸術や探究であれ，手段としてではなくそれ自体理想的な目的としての他の対象へと精神を固定させる．そうした人びとだけが，幸福であると私は考えた．[…] こうした理論は，人生における私の哲学的基礎となった．（Mill 1873, pp. 142-143）

ミルは依然として功利主義者であることを自認していたものの，幸福の追求を直接の目的とはしないという新たな「哲学的基礎」を確立することになったのである．これは，少なくともベンサム流の功利主義からは，大きく異なる方向へと踏み出すものであった．

以上のような経緯を通じて形成されたミルの功利主義思想は，1861 に出版された『功利主義論』（*Utilitarianism*）において明確に表現されている．ミルの『功利主義論』のテーマは，当時厳しい批判にさらされていた功利主義を擁護し，誤解を解消し，さらに修正を施すことであった．ここでミルが最も強調した論点の 1 つが，「快楽の質的差異」の問題であった．

幸福最大化にとって，その中身が「プッシュ・ピン（子どもの遊戯）であろうが詩歌であろうが何ら変わりはしない」といったベンサムの主張は――むろんベンサムはあえてそう主張したのでもあるが――，大きな反発を招くことになった．たしかにこれは，単なる低俗な快楽至上主義と受け止められかねないからである．幸福や快楽の性質はまったく重要ではなく，単にその量的な増減だけでもって，あらゆる個人の行為や政府介入の善し悪しを判定できるというこの部分に，ミル自身もはや納得できなかったのである．

そこでミルは，「快楽の質的差異」を提唱することで，功利主義の修正を前面に打ち出すのである．そうした彼の主張は，『功利主義論』における有名なフレーズにおいて，鮮明に表明されている．

> 満足した豚であるよりも不満足な人間であるほうがよく，満足した愚か者であるよりも不満足なソクラテスであるほうがよい．（Mill 1861 [1863], p. 14）

胃袋が満たされるような低俗な快楽で充足している「愚か者」が，はたして本当の意味で幸福な存在といえるのか．むしろ，決して現状に満足しきることはなく，真理のために非

業の死を遂げる命運にあったとしても，高尚な快楽を感受できる資質を備えたソクラテスこそが，むしろ本当の意味で幸福な状態にあるに違いない．こうしたミルの主張は，ベンサム流の功利主義の修正と見なすこともできるが，快楽に基づく帰結主義という観点からすれば，むしろ功利主義から大きく逸脱した見解である．あるいは彼は次のようにも主張している．

> 他のすべてのことを評価する際には，量だけでなく質についても考慮されているというのに，快楽の判断は量のみに依拠すると想定されるべきだというのは馬鹿げたことであろう．（Mill 1861 [1863], pp. 11-12）

それでは，幸福最大化において快楽の「量」だけではなくむしろ「質」を重視するというミルの立場は，具体的にどのような性質のものなのだろうか．あるいは，愚か者の享受する低俗な快楽とソクラテスの享受する高尚な快楽を分かつ相違とは，一体どこにあるのだろうか．この快楽の「質」の面において，とりわけミルが強調するのは，次のような利他的な人間性である．

> 他の人々の善のために自らの最大善を犠牲にする力が人類に備わっていることを，功利主義の道徳は認める．それは，犠牲がそれ自体として善であるということを認めないだけである．それは，総計としての幸福を増加させない，もしくは増加させる傾向のない犠牲については，無駄であると見なす．[…] 行為において何が正しいのかに関する功利主義の基準を形成する幸福とは，行為者自身の幸福ではなく，関わり合いのある全ての人の幸福である．彼自身の幸福と他の人々の幸福との間で，公平無私で博愛に満ちた観察者として，完全に不偏であることを功利主義は彼に要求する．
>
> （Mill 1861 [1863], p. 24）[6]

自分自身の幸福を利己的に追求するのではなく，他人や社会の幸福についてもフェアな立場から考慮し，むしろ率先してこれらを利他的に追求すること――あるいはそうした利他的な人間性を発展させること――が，その個人にとって本当の意味での幸福最大化に結び付きうる，という論理である．あるいはミルは，『経済学原理』や『代議制統治論』にお

6）あるいはミルは，次のようにも述べている．「あらゆる社会的結束の強化，そしてあらゆる社会の健全な成長は，他の人々の福利を実質的に考慮しようとする強い関心を各個人に付与するだけではない．それは，自らの諸感情をいっそう他の人々の善と同一視するようにも，あるいは少なくとも他の人々の善をいっそう実質的に考慮するようにも，彼を導くのである」（Mill 1861 [1863], pp. 46-47）．

いても，個人の利己的な振る舞いにたいしては，警鐘や批判を繰り返しているのである．最終的にミルが理想の人間像と見なすのは，他人や社会の幸福のためには，自分自身の幸福や命までをも差し出すことさえいとわない，自己犠牲の精神を蓄えた「道徳的英雄」であった．

以上のミルの主張は，功利主義を単なる快楽至上主義と見なすような，偏見や誤解を払拭すべく発せられたものであるが，同時にこれはベンサムから乖離する見解でもあった．むろんベンサム自身の立場が，単純に利己的な快楽最大化を推奨しているかといえば，そうとは限らない．たとえばベンサムの死後出版された『義務論』（*Deontology*）では，幸福と美徳が一致することなどが強調されているからである[7]．しかし，功利主義にたいする上述のような反発が強く存在しており，ゆえに「快楽の質的差異」を強調することで，功利主義を修正する必要性をミルは感じたのであった[8]．あるいは，ベンサムとミルとを比較した場合，少なくとも後者のほうが利他主義的な道徳や人間観へと強く踏み出していることは確実である[9]．

以上のように『功利主義論』で展開されたミルの倫理論ないし人間観は，経済学という社会科学の文脈において，どのように発現されるのだろうか．ミルの『経済学原理』（1848年）は，アダム・スミスの『諸国民の富』（1776年）にはじまり，リカードやマルサスを経て洗練された古典派経済学を完成へと導いた，画期的著作として評価されている．

ミルの『経済学原理』をめぐって，しばしば論争となっている問題として，社会主義ないし共産主義にたいするミルの態度とその変化があげられる．たとえば1848年の初版においては，社会主義とその問題点にたいして，極めて批判的な見解が示されていた．しかし，1852年の第三版以降では，社会主義にたいするミルの態度は明らかに軟化し，むしろ好意的なものへと変化しているからである．社会主義および共産主義の将来的な可能性について，ミル自身次のように述べている．

> 現在の世代が可能であると想定するよりもはるかに大きな程度で，公共精神を身に着ける能力が人間には備わっている．人類のより多くの部分が，公的な利益を自らのものとして感受できるように訓練されていく．こうした成功を，歴史は目の当たりにすることになるだろう．そして，共産主義的な協同以上に，そうした感情の育成にとっ

7）ベンサムの『義務論』については，西尾（1999）や児玉（1999）を参照．

8）ミルの『功利主義論』にたいする評価は研究者の間で意見が分かれるところである．たとえばSchneewind（1976）は，『功利主義論』にたいするさまざまな評価や反応について検討している．

9）ミルの功利主義を逸脱と呼ぶべきかどうかについても，やはり評価の分かれるところである．むしろRiley（1988）やWeinstein（2007）のように，逸脱と見なすのではなく，そこに功利主義における自由主義的ないし理想主義的な積極的意義を見出そうするものも存在する．

> て好ましい土壌は存在しない．なぜなら，目下のところ分断して利己的な諸利益の追求へと注がれている，あらゆる野心，肉体的ないし精神的活動は，その他の領域でその居場所を見出すことを必要としており，共同体の一般利益の追求においてその居場所を自然に見出すことになると考えられるからである．（Mill 1848 [1871], p. 206）

上述のように，社会主義や共産主義にたいする彼の見解は，しばしばそれ自体として論争となっている[10]．たとえば別の場所では，次のように当時の社会主義者たちの言葉にたいして，ミルは強い警告を発してもいるからである．

> 彼らの教えの最も顕著で最も激しく怒りをぶつける部分，すなわち競争にたいする宣告について，私は完全に意見を異にしている．さまざまな点で既存の社会における取決めをはるかに凌駕する道徳的諸理念について，彼らは一般にその実際の作用に関する非常に混乱した誤った諸概念を抱いている．そして私が思うに，彼らの最も深刻な過誤の１つは，現在存在しているあらゆる経済的諸悪を競争のせいにしている点である．（Mill 1848 [1871], p. 792）

市場での競争や資本主義自体を全面的に排斥すべきだとする社会主義者や共産主義者の主張にたいしては，ミルは決してゆずることはなかった．少なくとも現状では，社会全体をより豊かで幸福な状態へと導く原動力として，競争にかわるものは存在しないと彼は認識していたからである．とはいえ自伝のなかでも率直に語られているように，少なくとも将来の社会においては共産主義的な共同体を形成することが望ましく，現状でも一部の人々の間では実現可能であると彼が真剣に考えていたのも事実である．なぜなら，ミルにとっての真の「一般幸福」とは，単に量的な快楽の最大化によって実現されるものではなく，そこに存在する人々の人間性の発展を通じてのみ実現されるものであったからである．

ミルの社会主義や共産主義への強い共感の背後には，19 世紀当時の風潮としてのロマン主義的な傾向が強くはたらいているとも指摘されている．周知のように，経済成長の限界を迎えた後の「定常状態」の到来について，われわれはそれを忌避する必要はなく，むしろ進んで受け入れるべきだとミルは論じている．経済成長の実現のために，あらゆる資源を使い果たし，自然環境を破壊し尽くしてしまう前に，ある一定の豊かさに達した時点で，私たちは利己的な競争や足の引っ張りをやめて，人間性を洗練させていくことを通じて真の豊かな社会を実現していくべきだとミルは訴えかけるのである．

10）たとえば，Davis（1985）を参照．

以上のような人間性の問題に関するミルの見解は，『自由論』（1859 年）や『代議制統治論』（1861 年）といった他の彼の著作においても，おおむね一貫していると考えられる．たとえば，普通選挙の実現に向けた政治改革が活発に議論されていた真っただなかに刊行された『代議制統治論』では，すべての人にたいして完全に平等な選挙権を認めてしまうことの危険性について，ミルは繰り返し強い口調で警告を発している．彼の目からすれば，読み書きさえおぼつかない当時の労働者階級の教育水準は，まったく不十分であった．彼らが完全に平等な選挙権を手にすることになれば，数のうえでは多数派を占める彼らの浅薄な判断によって，むしろ社会全体の利益が損なわれてしまう恐れがあることを，ミルは懸念したのである．

同時に彼は，すべての人々が――あるいは男性だけでなくすべての女性もが――選挙権を手にすべきであるとも主張している．なぜなら選挙権を通じて人々が社会全体の問題に関心をもつようになれば，彼らの知性を向上させるこのうえない教育効果が期待されるからである．将来的には，労働者階級をも含むすべての人々が，より優れた人間性を獲得しうることにミルは何ら疑いを抱いていなかった．とはいえ，現状ではその知性や人間性に差異があることを前提としたうえで，ミルが実践的提案として掲げたのは，すべての人に選挙権を認めつつも，同時に富裕層による複投票を実施すべきというものであった[11]．

Ⅲ．シジウィック――古典的功利主義の完成――[12]

シジウィック（Henry Sidgwick: 1838-1900 年）は，ベンサム，ミルに続く，最後の古典的功利主義者として知られている．現代においても，功利主義を強く批判したロールズからでさえ，シジウィックの功利主義は「最も明晰で最も利用しやすい定式化」（Rawls 1971, p. 22）として称賛されている．シジウィックは倫理学の分野でその名を知られた存在であるが，彼は経済学や政治学においても重要な足跡を残しており，ベンサムやミルと同じタイプの広い意味での哲学者といえる．

シジウィックの知的形成における 1 つの重要な契機は，彼がケンブリッジの学生であった 1856 年の秋に，「使徒の会」（the Apostles）という秘密組織に招待されたことであった．

11）教育水準が一般に高くその投票は社会全体の真の利益により近いと考えられるが，数のうえでは少数派となる富裕層にたいしては，複数の投票権を与えることによって全体のバランスをとるべきだとミルは提案しいている．もう一つの彼の提案としては，記名投票の実施がある．秘密投票の場合よりも，階級利害に捉われにくく，各個人がより社会全体の利益の観点から投票するように導かれうると彼は考えたのであった．

12）本節におけるシジウィックに関する議論の詳細については，中井（2009）を参照．また，シジウィックの生涯や人物像については，Sidgwick（1906）や Schultz（2004）を参照．

> […] 使徒の会の精神は，次第に私を夢中にさせ虜にした．それは親密な友人たちのあいだで，絶対的な情熱と完全に率直な態度でもって，真理を追求するという精神であった．（Sidgwick 1906, pp. 34-35）

秘密裏に選抜された学生によって構成される，エリート主義的色彩をも帯びた「使徒の会」は，シジウィックを魅了し，その後の彼の生涯全体に決定的な影響を与えることになった．

もう一つの重要な要因は，J.S. ミルの存在であった．1959 年にケンブリッジ大学を卒業して，研究活動を開始した当時の様子を，シジウィックは次のように語っている．

> […] 主として J.S. ミルの影響のもとで，その理念は私の精神を徐々に支配することになった．[…] 社会的側面から私たちが目指したのは，包括的で不偏的な調和に導かれる科学の光をかざすことによって，政治・道徳・経済に関わるあらゆる人間関係を見直すことであった．無暗な改革は，科学の裁きによって，一般幸福に寄与しないと宣告された．（Sidgwick 1906, pp. 39-40）

ミルの功利主義思想は，社会的に大きな影響を与えていた最盛期にあり，シジウィックは，「それまで教え込まれてきた道徳諸規則による外在的で恣意的な圧力からの救済をミルに見出した」（Sidgwick 1874 [1901], Preface to the 6th edition）のであった．こうして，徹底的に真理を追究する使徒の精神と一般幸福に照らして科学的に人間社会を見直す功利主義とをその信条としながら，シジウィックは研究活動に打ち込んでいくのである．

しかし，こうしたシジウィックの信条は，彼の内面に葛藤を持ち込むことにもなる．彼は，次第に自らの信仰心にたいしても，疑念を深めていくようになるのである．あるいは当時のケンブリッジの伝統として，教員にたいしてイギリス国教会への宣誓が求められており，シジウィック自身も 1859 年にフェローシップを受ける際，この「39 箇条」に署名していた．しかし，自らの信条とは相容れないと確信するようになった彼は，自ら宣誓を撤回して辞職に踏み切ったのであった[13)]——興味深いことに，ベンサムもオックスフォード大学に入学する際に，これと同じ問題に直面している．

宗教試験の問題に悩まされていた 1867 年の夏，シジウィックは面識のなかったミルにたいして長文の手紙を送り，率直に自らの境遇を打ち明けて助言を求めている．ミルから

13）宣誓抜きにして新たに職を用意されるという例外的待遇によって，彼は慰留されることになった．

は丁寧な返答が寄せられたものの，返答はシジウィックの抱えた宗教的・道徳的問題の解決を決定づけるものとはならなかった[14]．

こうした内面における葛藤とも向き合いながら，シジウィックが自らの思想を形成していくうえで，次第に彼はミルからも距離を置くようになる．こうした過程は，「精神の危機」を通過して，ベンサムから距離を置くようになったミルの場合とも重なり合う．シジウィックにとって，とくに受け入れ難く感じられるようになったのは，快楽の不偏性や利他主義を強調するミルの議論であった．

> 私はミルを理解するうえで，心理的快楽主義（各個人は自分自身の幸福を追求する）と倫理的快楽主義（各個人は一般幸福を追求すべきである）という二つの要素を区別している．当初この両者に魅了されて，それらが相矛盾しうることに気付かなかった．[…] 両者は快楽や幸福といった同じ用語を用いており，そこにはミルの説得力も加わって，行為の自然的な目的（私的幸福）と義務的な目的（一般幸福）とが対立しうることは，包み隠されていた．（Sidgwick 1874 [1901], Preface to the 6th edition）

「一般幸福」という包括的な理念を掲げる功利主義こそが，ドグマティックな美徳や価値観に束縛されない，科学的で客観的な原理であるとシジウィックは捉えていた．とはいえ，各個人の私的幸福の追求は，社会全体としての一般幸福と常に一致するか．あるいは各個人の私的幸福の追求が，もしも他人や社会の幸福と衝突するならば，それはどのように解決されるべきなのか．前節でみたように，利他的な人間性の発展を通じて，個人の内面で私的幸福と一般幸福とが一致しうるというのがミルの提示した――少なくとも将来的な――解決策であった．

こうした一般幸福の追求のために個人の自己犠牲をも正当化するようなミルの主張を，シジウィックは受け入れることができなかった．しかしシジウィックは，自己犠牲や利他主義が必ずしも不合理であると考えていたわけではない．むしろ他人や社会の幸福のために，何かすべきであるという義務観を個人が抱くこともまた合理的であると考えた．しかしながら，社会的な義務観が私的幸福の追求と対立する場合には，個人が後者を優先させたいと考えることもまた合理的であると彼は確信したのであった[15]．

こうしてミル以外にこの問題の解決の手掛かりを求めるべく，シジウィックはアリスト

14）シジウィックがミルから受け取った手紙は，ケンブリッジ大学トリニティ・カレッジ図書館所蔵のシジウィック文書のなかに収録されている．

15）Schneewind（1977）は，この点に関してシジウィックは「明らかにミルの議論を拒否している」と指摘している．

テレスやカントなどを再検討したうえで，彼が達した結論こそが「実践理性の二元性」（the dualism of practical reason）であった．

> 利己心だけでなく社会的福利を守りたいという共感と諸感情からも，私たちは一般幸福につながる諸規則の順守を望みたくなるに違いない．義務と見なされることが利己心とうまく調和するような有り触れた諸事例において，実践理性は断固として義務を履行するように私たちを駆り立てるであろう．しかし，利己心と義務との衝突が認められる数少ない諸事例において，実践理性は分断されてしまい，いずれかにつこうとするのを止めてしまうであろう．（Sidgwick 1874 [1901], p.508）[16]

シジウィックの『倫理学の諸方法』（1874 年初版）の課題は，個人のなすべき行為に関する究極的な原理を突き止めることであった．そしてシジウィックは，自分自身の私的幸福を利己的に追求する「利己主義の方法」（the method of egoism）と社会全体の幸福を利他的に追求する「功利主義の方法」（the method of utilitarianism）とは，ともに合理的であり，両者は対立する場合さえあると結論付けた．『倫理学の諸方法』は高い評価を得たものの，彼の結論は明らかに折衷的で両義的あり，様々な角度から反発を招くことになった[17]．

それでは，こうした倫理学における結論は，果たして経済学や政治学といった彼の社会科学の著作とどのような関係にあるのだろうか．社会全体にとって望ましいのは，一般幸福の最大化であるとシジウィックは考えていた．これこそが，「政治的立場が顕著に異なる人々」からも同意されうる，客観的基準であると彼は考えたからである（Sidgwick 1891 [1908], 39-40）．そして，個人の私的幸福の追求はある程度一般幸福と合致しうるが，常に調和するとは限らない．そしてこうした点に，一般幸福の観点からの政府の積極的な役割が求められる，というのが彼の理解であった．『倫理学の諸方法』の終盤で，シジウィックは次のように述べている．

> 経済学者が提示しているように，文明社会における人々のあいだで複雑な協業制度が

16）次のようにも述べている．「普遍的視野に立つならば，少ない善よりも多い善を選好するほうが――少ない善が当為者の私的幸福である場合にせよ――合理的であろう．にもかかわらず，自らの幸福を選好することが個人にとって合理的であることもまた，否定し難く思われた．自己犠牲だけでなく自愛もまた合理的であることは，否定し難く感じられた．カントやミルといった私の教師たちは，これを進んで認めようとはせず，それぞれ異なる方法で拒否した．しかし私は，こうした確信を放棄することはできなかった」（Sidgwick 1874 [1901], Preface to the 6th edition）．

17）「実践理性の二元性」に関して，とくに近年では Frankena（1992）や Schultz（2004）などのように，その意義を肯定的に捉えよとするものある．しかし，『倫理学の諸方法』が出版された当時においては，たとえば Barratt（1877）のような批判を招くことになった．

組織化されていくにつれて，幸福の諸手段は大幅に増加している．そうした制度のもとで，各個人が自由な契約に基づき，好き勝手にサービスを交換するように任せておくことが，一般に最善であると考えられる．しかし，こうした一般原理にたいしては，多くの例外が存在する．[…] とりわけ必要なサービスへの要求は，明らかに功利主義に依拠するであろう．実際こうした義務を適切に果たすことは，社会の福利にとって重要であるために，近代の文明社会においてそれはある程度政府活動の領域に位置づけられているのである．（Sidgwick 1874 [1901], pp. 435-436）

したがって，倫理学に続いて彼が取り組んだのが学問領域は経済学であり，その成果は『経済学原理』（1883 年初版）として登場することになった．シジウィックの『経済学原理』は，たとえばピグーの厚生経済学への橋渡しとなった点などが高く評価されている[18]．さらに彼の『政治学要論』（1891 年初版）の前半部分では，『経済学原理』の議論を踏襲しながら，いっそう包括的な政府介入論・経済政策論が展開されている．

シジウィックが『経済学原理』や『政治学要論』を執筆・出版したその時代は，1870 年代以降の長期不況の真っただなかであった．労働問題が大きな社会的関心となり，社会主義・集産主義を要求する議論が注目を集め，この問題をこのまま放置してしまえばやがて革命が勃発するのではないかと囁かれる不安定な状態にあった．ここで，市場原理や自由放任を軸とする従来の経済学にたいする信頼が，大きく揺らぐことにもなった．

この混乱した情勢のもとで，むしろ一般幸福という客観的な基準に照らしながら，本当に望ましい政府の経済的役割とは何かを慎重に検討しなければならない，というのがシジウィックのスタンスであった．

分配への政府介入について，私は純粋に経済的視点もしくは功利主義的視点から議論することを提案したい．産業の生み出す生産と分配に関する限りで，個人主義や社会主義はどの程度最大限の幸福を導くと期待されるのだろうか．二つの見解の間にある対立は，一見したところ調停不可能である．しかしながら私が思うに，両学説を注意深く考察することでその対立を大幅に縮小させること，そして究極的には両者の間で有益な議論が行われうる共通の土台を見出すことが可能となるであろう．

（Sidgwick 1883 [1901], pp. 498-499）

18）O'Donnell（1979）などがそうである．とはいえ Stigler（1990）のように，ミルの経済学と対比させながら，シジウィックの経済学を後ろ向きの著作と見なすような評価がつきまとうのも事実である．しかしとくに最近では，Backhouse（2006）や Medema（2009）などのように，ケンブリッジ学派の形成への貢献や「市場の失敗」にたいする極めて優れた認識として，その積極的意義を評価する傾向も存在する．

そこで，まずは各個人の利己心に基づく自由な経済活動こそが，社会全体を豊かで幸福な状態に導く原動力であると論じることで，個人主義にかわる経済社会の基盤は存在しないとシジウィックは強く主張する．

> アダム・スミスとその後続に導かれつつ，社会生活の経済面を真剣に考察する人のうち，利己心という動機が間断なく強力に作用する点に疑念を抱く人はいない．そして，利己心に代わるような推進力と調整力を備えたものを見出す困難は，現在の個人主義的基盤以外の基盤の上に社会秩序を再構成しようと目論む，あらゆる巨大スキームを拒否する際の，最も重要な根拠となる．（Sidgwick 1891 [1908], pp. 401-402）

社会主義や集産主義を強く牽制する一方で，疑問視されていた市場経済や個人主義を強く擁護することが，シジウィックのねらいの１つであった．

しかし同時にシジウィックは，個人主義における「補助的で副次的な要素」として，「社会主義的介入」を講じる余地が存在するとも主張する．ただしこれは，ミルのような，次なる段階としての社会主義・共産主義の実現に期待する立場とは異なる．むしろシジウィックは，あくまで個人主義を経済社会の基盤としながら，しかしその問題を補完し，一般幸福をさらに増進させる副次的な要素として，「社会主義的介入」を位置づけるのである．こうした彼の認識こそが，厚生経済学へ通じる重要な一歩であったと評価することができる．そして，こうした認識へとシジウィックが達し得たその理由は，一つには個人の内面で利己心と利他心を完全に統合することはできず，各個人の私的利益の追求と一般幸福が必ずしも一致しないという，彼の倫理学研究を通じた確信があったから．もう１つは，社会全体としての客観的基準として，一貫して功利主義を据えるべきだという彼の確信がそこにあったからである．

具体的にシジウィックが提唱したのは，公共財の提供や独占・寡占にたいする規制といった，いわゆる市場の失敗への政府介入であり，これを彼は広義の社会主義的介入と呼んでいる．しかし，再分配政策のようなさらに踏み込んだ狭義の社会主義的介入ないし集産主義にたいしては，彼は極めて慎重であった．たとえば，シジウィックは「富のより大きな平等化は，産業的発展の依拠する資本蓄積を阻害し，蓄積される資本の管理を悪化させることになりかねない」（Sidgwick 1891 [1908], p. 161）として，こうした方針を一般幸福の観点から批判する．あるいは同じ観点から，政府権力の強化がもたらす危険性を彼は強く牽制するのである．

望ましい社会の基準として一般幸福を掲げるシジウィックの方針は，『政治学要論』後

半や彼の死後出版された『欧州政体発展史』(1903 年) で展開される，彼の政治体制論でも同様である．シジウィックは政府のあるべき構造について，貴族政と民主政のバランスを軸に議論を展開する．彼は当時の政治情勢が民主政へと過度の傾きつつある現状を危惧していた．そしてミル同様に，民主政には多数派の利害のために少数派の利害を犠牲にしてしまう危険性があるとシジウィックは主張する．また，本来の政府の職務遂行には特別な資質が必要であり，これは民主政において損なわれる危険性があり，むしろ貴族政のメリットはこの点に求められると彼は論じる．シジウィックの主張の背景には，1880 年代後半における労働運動の激化や 1884 年の第 3 回選挙法改正などがあった．結局のところ，「その選挙権が普遍的であっても，代議政府は民主制を系統立てる単なる一形態ではなく，むしろ民主制と貴族制の結合ないし融合である」(Sidgwick 1891 [1908], pp. 616-617) として，彼は功利主義の観点から両者の望ましいバランスを求めようとしたのであった．

Ⅳ．おわりに

以上のように，功利主義が本格的に展開されるようになったのは，18 世紀後半のベンサム以降であった．その後，J.S. ミルによって修正され，最終的にシジウィックの手で古典的功利主義として完成されることになった．

ベンサム，ミル，シジウィックの間には，重要な共通点が存在する．それは彼らがいずれも功利主義者であることを自認し，幸福を基準として道徳や社会の問題について論じた点である．何らかのドグマや特定の価値観に依拠するのではなく，幸福ないし快楽という弾力的で包括的な基準こそが，ときに思想信条を異にする私たちすべてにとって，本当に望ましい共通の客観的基準であると彼らは確信したのであった．こうして彼らは，一般幸福に照らしながら，さまざまな実践的提案を導き出したのであった．

しかし，個人の道徳と社会全体の問題がどのように結節されるのかという点で，彼らの間に顕著な相違が存在する．ミルはベンサムの功利主義を乗り越えるべく，快楽の質的差異を打ち出し，人間性の発展や利他主義を正当化したのであった．そして将来の経済社会のビジョンとして，個人主義ではなく社会主義が望ましいと彼が確信した理由も，ここにあったと考えられる．こうしたミルの立場は，その是非はさておき，厳密な功利主義からは逸脱して理想主義に接近するものであった．

他方シジウィックは，ベンサムとミルとを折衷した立場を示した．彼は道徳の問題に関して，ミルに反発するかたちで，個人の内面で利己心と利他心を統合することは不可能であると見切った．ゆえに個人主義を擁護する一方，副次的要素としての社会主義的介入に

ついて論じることで，厚生経済学の形成に貢献することになった．彼は価値判断の客観性を保つために，ミルの質的差異に関する議論を退け，幸福に関する帰結主義を一貫させながら，個人の道徳と社会全体の関係を整合的に論じたのであった．ここにシジウィックは，古典的功利主義を完成に導いたと評価することができる[19]．

それではベンサム，ミル，シジウィックを通じて形成・展開された功利主義は，どのように受け止められたのかについて若干言及したい．1つの重要な反応としては，T.H. グリーン（Thomas Hill Green: 1836-1882年）をはじめとする，理想主義や完成主義からの反発が挙げられる[20]．人格の完成などを強調する理想主義は，功利主義における「その快楽主義的心理学から生じる誤謬」（Green 1883, p. 361）を糾弾する[21]．しかし，他方で彼らは，快楽の質的差異や人間性の発展を強調するミルにたいしては，むしろ好意的な評価を与えている．こうした反応からも，ミルの功利主義が特徴的である様子がうかがえる．たとえばグリーンは，「快楽の価値は単にその量に依存するという厳密な功利主義の学説からミルが逸脱した本当の原因は，あらゆる欲求が快楽のためにあるという学説を彼が放棄してしまった点に求められる」（Green 1883, p. 189）と好意的に評している．あるいは，しばしばミルが理想的功利主義と呼ばれるのも，このためである．

もう1つ，ケンブリッジにおけるシジウィックの後輩たちからの反応を取り上げたい．一見すると，彼らのシジウィックに対する反応は，冷淡なものである．ラッセル（Bertrand Russell: 1872-1970年）の場合は，シジウィックを時代遅れの人物に過ぎないと見なしていた．あるいはケインズ（John Maynard Keynes: 1883-1946年）の場合，「彼はキリスト教が真理であるかどうかを疑い，それが真理ではなかったことを証明し，真理であれば良かったのにと願っただけである」（Harrod 1959）と書き綴っている．ケインズを魅了したのは，愛や美に包まれた心の重要性や直観的に把握される善の絶対性を説くムーア（George Edward Moore: 1873-1958年）であり，むしろ彼は「ベンサム主義的伝統」や「経済的基準の過大評価」を嫌悪し（Keynes 1938），またとくに若かりし日の彼らの目には，シジウィックは優柔不断な存在として映ったのであった．

しかし，彼らの評価には別の一面も存在する．少なくともシジウィックの人物像に関しては，彼らは憧憬と親愛の念を抱いていた．たとえばラッセルは，シジウィックがイギリス国教会への宣誓を拒否した一件を取り上げながら，「彼の知的な誠実さは絶対で揺るぎ

19）Rawls（1993）は，ベンサムとシジウィックの功利主義を「厳密な古典的学説」と呼ぶのに対して，ミルが功利主義者であるかは「怪しい」とする．Medema（2009）は，「このようにシジウィックはミルがしたよりもその功利主義においてはるかに一貫性を示した」と評している．

20）T.H. グリーンとシジウィックはともにヨークシャーの出身であり，また同じパブリック・スクール（ラグビー校）の出身であり，友人関係にあった．

21）実際グリーンは『倫理学序説』（1883年）いおいて，シジウィックの功利主義を繰り返し批判している．

なかった」（Russell 1959）と語っている．ケインズの場合も，「彼の良心は並み外れており，彼の道徳的善良さを疑う余地は全くない」（Harrod 1951）と述べている．あるいはケインズを感化したムーアの『倫理学原理』（1903 年）自体も，間違いなくシジウィックの功利主義から強い影響を受けた著作である．たとえばムーアは，利己心が普遍的善の一部でもあることを無視したシジウィックの利己主義に関する議論は，「馬鹿げた結論」であると強く批判している．しかし，他方でムーアは，シジウィックがミルの快楽の質的差異を拒否した点などを高く評価しているのである[22]．使徒の会の後輩たちがはたしてシジウィックの功利主義のどの部分を受容し，そしてどの部分を受容しなかったのかを見極めるためには，本稿の対象を超えたさらに広範な議論が必要となる．とはいえ，親密な友人同士で誠実に真理を追求するという使徒の精神を 1 つの媒介として，シジウィックの功利主義が広い意味ではムーアやケインズなどに何らかの積極的な影響を与えた側面も存在するのではないだろうか．

最後に，道徳の問題を論じる際や倫理学の領域において，功利主義の是非に関する活発な議論や根強い反発がいまなお存在する一方で，経済学の領域において，功利主義の是非そのものが争点となることは，昨今では比較的少なくなっているように感じられる．あるいは経済学者が，自らを功利主義者と認識すること自体が，以前より少なくなっているのかもしれない．しかしながら，経済学の発展に貢献した主要な人物たちは，彼ら自身が自覚している場合であれ，あるいは周囲からの評される場合であれ，その多くが功利主義者と見なされる人物たちであった．少なくともロールズの目からすれば，19 世紀以前における功利主義と経済学の関係は，次のように極めて密接なものであった．

> 1900 年以前のイギリスの伝統のなかで，重要な経済学者たちと著名な功利主義者たちを見渡そうとするならば，彼らが同一の人物たちであったことを，私たちは見出すであろう．ここにリカードが欠けてはいるが，ヒュームとアダム・スミスは，いずれも功利主義的な哲学者であり，なおかつ経済学者であった．ベンサムとジェームズ・ミル，ジョン・スチュアート・ミル，[…] そしてシジウィックについても，同様であった．（Rawls 2007, p. 162）

ある意味現代においては，功利主義は私たちの経済観の背後にある思想として，すでに広く浸透しているのかもしれない．たしかに一般幸福を社会的規範として掲げることは，私たちの経済に関する見解とうまく合致するようにも思われる．経済成長を実現すること，

22）Shionoya（1991）では，シジウィック，ムーア，ケインズへと連なる道徳観の存在が示されている．

全体として効率的で豊かな社会を実現することは，少なくとも他の事情にして等しい限り，私たちすべてにとって望ましいと考えられるからである．これは経済の問題に照準を向ける場合，ベンサム，ミル，シジウィックを通じて形成・洗練された功利主義が，多様な価値観を包摂しうる普遍的な価値観と見なされる可能性を示唆している．しかし同時に，功利主義にその内在的な問題が備わっているとすれば，その問題が私たちの経済観に跳ね返ってくることをも意味するのかもしれない．

参考文献

加藤尚武（1997）『現代倫理学入門』講談社

児玉聡（1999）「ベンタムにおける徳と幸福」『実践哲学研究』22 号

———（2010）『功利と直観：英米倫理思想史入門』勁草書房

中井大介（2009）『功利主義と経済学：シジウィックの実践哲学の射程』晃洋書房

西尾孝司（1999）「ベンサム『義務論』を読む」『神奈川法学』32 巻 3 号

矢島杜夫（2006）『ミルの『自由論』とロマン主義：J.S. ミルとその周辺』御茶の水書房

Backhouse, Roger E. 2006. Sidgwick, Marshall, and the Cambridge School of Economics. *History of Political Economy*. 38-1: 15-44.

Bain, A. 1882. *John Stuart Mill: a Criticism: with Personal Recollections*. London: Longmans.

Barratt, A. 1877. “The «suppression» of egoism”, *Mind*, 1.

Bentham, Jeremy. 1789 [1996]. *An Introduction to the Principles of Morals and Legislation*. In *The Collected Works of Jeremy Bentham*. Oxford: Clarendon Press.［山下重一訳『道徳および立法の諸原理序説』（『世界の名著 38 ベンサム J.S. ミル』中央公論社所収，1967 年］

Capaldi, N. 2003. *John Stuart Mill: a biography*. Cambridge: Cambridge University Press.

Davis, Elynor G. 1985. Mill, Socialism and the English Romantics. *Economica*, 52: 345-358.

Frankena, W.K. 1992. Sidgwick and the history of ethical dualism. In *Essays on Henry Sidgwick*, edited by Schultz, B. Cambridge: Cambridge University Press.

Green, T. H. 1883. *Prolegomena to Ethics*. Oxford: Clarendon Press.

Harrod, R.F. 1951. *The Life of John Maynard Keynes*. London: Macmillan.［塩野谷九十九訳『ケインズ伝』1-3 巻，東洋経済新報社，1954-56 年］

Keynes, J. M. 1938. “My Early Beliefs”, printed in *Two Memoirs* (1949). London: Rupert Hart-David.［大野忠男訳「若き日の信条」『ケインズ全集 10 人物評伝』東洋経済新報社 , 1980 年］

Levi, A. W. 1945. The “Mental Crisis” of John Stuart Mill. In *Psychoanalytic Review*, 32: 86-101.

Medema, Steven G. 2009. *The Hesitant Hand: Taming Self-Interest in the History of Economic Ideas*. Princeton and Oxford: Princeton University Press.

Mill, J. S. 1848 [1871]. *Principles of Political Economy*. 7th ed. In *The Collected Works of John Stuart Mill*, Toronto: University of Toronto Press.［末永茂喜訳『経済学原理』(1)-(5) 岩波書店，1959-1963 年］

———. 1861. *Considerations on Representative Government*. London: Parker.［水田洋訳『代議制統治論』岩波書店，1997 年］

———. 1861 [1863]. *Utilitarianism*. London: Parker.［伊原吉之助訳「功利主義論」『世界の名著 38 ベンサム J.S. ミル』中央公論社所収，1967 年］

———. 1873. *Autobiography*. London: Longmans.［朱牟田夏雄訳『ミル自伝』岩波書店，1960 年］

Moggridge, D. E. 1992. *Maynard Keynes: An economist’s biography*. London: Routledge.

Moore, G. E. 1903. *Principia Ethica*. Cambridge: Cambridge University Press.［泉谷周三郎他訳『倫理学原理』三和書籍，2010 年］

O’Donnell, M. G. 1979. “Pigou: an extension of Sidgwickian thought”, *History of Political Economy*, 11(4): 588-605.

Rawls, J. 1971. *The Theory of Justice*. Cambridge: Harvard University Press.［矢島鈞次監訳『正義論』紀伊國屋書店，1979 年］

———. 1993. *Political Liberalism*. New York: Columbia University Press.

———. 2007. *Lectures on the History of Political Philosophy*. Cambridge: Harvard University Press.

Riley, J. M. 1988. *Liberal Utilitarianism: Social Choice Theory and J. S. Mill's Philosophy*. Cambridge: Cambridge University Press.

Russell, B. 1959. *My Philosophical Development*. London: George Allen & Unwin.［野田又夫訳『私の哲学の発展』みすず書房，1960 年］

Schultz, Bart. 2004. *Henry Sidgwick—Eye of the Universe: An Intellectual Biography*. Cambridge: Cambridge University Press.

Schneewind, J. B. 1976. Concerning Some Criticism of Mill's Utilitarianism, 1861-76. In *James and John Stuart Mill: Papers of the Centenary Conference*, edited by John M. Robson and Michael Laine. Toronto: University of Toronto Press.

———. 1977. *Sidgwick's ethics and Victorian moral philosophy*. Oxford: Clarendon Press.

Shionoya, Y 1991. "Sidgwick, Moore and Keynes: A Philosophical Analysis of Keynes's 'My Early Beliefs'", In *Keynes and Philosophy: Essays on the Origin of Keynes's Thought*. Aldershot: Edward Elgar.

Sidgwick, A. and E.M. 1906. *Henry Sidgwick: A Memoir*. London: Macmillan.

Sidgwick, Henry. 1874 [1901]. *The Methods of Ethics*. 6th edition. London: Macmillan.

———. 1883 [1901]. *The Principles of Political Economy*. 3rd edition. London: Macmillan.

———. 1891 [1908]. *The Elements of Politics*. 3rd edition. London: Macmillan.

——— 1902. *Philosophy: its scope and relations*. London: Macmillan.

———. 1903. *The Development of European Polity*. London: Macmillan.

Skidelsky, R. 1983. *John Maynard Keynes – Hopes Betrayed 1883-1920*. London: Macmillan.［宮崎義一監訳，古屋隆訳『ジョン・メイナード・ケインズ：裏切られた期待／ 1883-1920 年』東洋経済新報社，1987 年］

Stigler, George J. 1990. The Place of Marshall's Principles in the Development of Economics, *Centenary Essays on Alfred Marshall*, edited by J. K. Whitaker. Cambridge: Cambridge University Press.

Weinstein, D. 2007. *Utilitarianism and the New Liberalism*. Cambridge: Cambridge University Press.